

## 自主シンポジウムII：「教育評価研究の現状と課題」

企画者	梶田叡一（大阪大学）
司会者	藤田恵壘（岐阜大学）
話題提供者	井上正明（福岡教育大学）
	西川和夫（三重大学）
	撫尾知信（佐賀大学）
	梶田叡一（大阪大学）

本シンポジウムは、今日の評価研究の大きな動向を踏まえつつ、今後の教育研究全般に渡って評価が果たすべき役割と課題を見定め、これを多面的に検討することによって、我国における教育の現実を改善・改革していく新しい方向を追求したものである。

企画者である梶田は教育評価研究の歩みをソーンダイク・タイラー・ブルームと結んで、その今日的課題の歴史的考察を行った。すなわち、ソーンダイクの教育測定運動を批判してタイラーが1930年代に展開した教育評価運動においてもたらした教育評価の基本的考え方を 1) 教育目標の設定、2) 多面的評価方法の開発、3) 授業改善へのフィードバックという 3 点においてとらえ、1960年代よりブルームらを中心として具体化されてきた評価の理論と実践に関する現状と課題を展望した。

我国においても、教育目標の系統分類（タクソノミー）は授業設計の明確化、評価的確化に役立つものとして多くの関心を集め、さまざまな試みが行われている。また、従来の集団準拠（ノルム）による評価から目標標準拠（クライテリオン）による評価への関心が高まり、到達度評価に関する研究と実践が現場では進んでいる。評価方法の開発も教育工学の発達、教科教育学や教育心理学の教育現場への接近に伴ない、新しい多面的な発展を示している。完全習得学習（マスター・ラーニング）の理論を背景として、学習を促進させる形成的評価の役割と機能も重視され、教授・学習・評価の一体化があらためて強調されるようになった。こうした教育活動の現実を的確にとらえ、問題解決の方向を示すことが本シンポジウムの課題であるとした。

藤田は司会者として次の 3 点を挙げ、これらに対する関心を求めた。1) 評価研究の今日的意義：人間社会の基本的機能としての評価がいかにあるべきかを原理的に、また、歴史的にとらえ直す必要があること。2) 評

価がもたらすものに対する実証的研究：どのような評価がどのような行動や事態をもたらしてきたかという視点から評価の妥当性を問い合わせること。3) 個人を生かす評価観の確立：すなわち個人を単に集団の成員として考えるだけではなく、集団を自主的に構成する個性的存在としてとらえていく idiographic な approach とその方法論の確立が望まれるとした。

次に 4 人の話題提供者によって約 2 時間にわたる研究発表が行われた。

### 井上正明

#### 評価についての教師の意識

約 10 年間の間、教師が教育評価に関する用語についてどのようなイメージをもっているかを意味微分法と自由記述法によって調べ、現場教師の評価に対する意識の構造をわが国の教育界の流れとの関連でとらえながら、教育評価の現状と問題点を検討した。

以上のような調査から次の 3 点が明らかになった。(1) 教育用語についての教師の意識は教師の世代や教職経験の差、さらに教師の役割や立場の違いによって相違がある。(2) 最近の教育界の主流をなすと考えられる到達度評価や観点別学習状況の評価について、教師はそれを実践に移すことが大変むずかしいと感じていること。(3) 教育評価についての教師の意識は、教師の年齢や教師経験よりもその教師の評価観によって規定されると考えられる。

このような結果を踏まえて、今後教育評価の研究や実践を現場で進めていくためには、教育のあり方を本音で話し合える学校の雰囲気づくり、問題点を集団討議によりまとめ実践的に解決していくこと、保護者との協力体制をつくり評価への認識を高めていくことが大切である。

### 西川和夫

#### 教材開発と評価

現在の日本社会の教育は、きわめて多様な形で展開している。教育に対する社会のニーズが多様化すれば当然そのような教育活動が効果的に進められるための媒体としての教材も多様化していく。こうした現状にあっては、教材の分類、教授・学習パターンに応じた教材の機

## 教育心理学年報 第23集

能、教材の多面的評価、教材開発のための視点が十分に検討され、有効に利用されていなければならない。

教材の分類は情報入力の型によって、視覚、視覚対話、聴覚、聴覚対話、視聴覚、視聴覚対話、操作の7つの型に分けられるが、実際の教材の多くはこれらの混合した形で構成される。教授・学習パターンにおける教材の機能については、教授者一斉指導型、教授者個別指導型、学習者個別学習型、学習者集団学習型の4型についてそれぞれに適した教材の特性を論じた。教材評価の次元としては、習得度、応用力、持続性、所要時間、健康への影響、負担感、興味、態度形成、対人関係、信頼性、アフターケア、コストなどを検討し、総合評価する必要がある。教材開発の視点については、開発目標の設定にあたり教材のニーズと社会的意義の両面を考える必要があること。教材効果を常に組織的に評価しそれに応じた管理が必要であること、また、教材の教育的品質管理システムを確立することが大切である。

**撫尾知信****教育測定論の展開と評価研究**

今日めざましい発展をとげた教育測定や評価の研究が、わが国においてどれだけ現場の教育に貢献しているかは疑問である。その1つとして測定・評価に関する用語の中に、その定義や概念規定のあいまいなものが多い。このことは研究者と現場教師の間に大きな意志の疎通を欠く原因となる。たとえば、「測定」と「評価」や「テスト」なども言葉の上では区別されていても、実際に用いられているところでは意味の重なりや混乱が生じている。また、「ノルム」、「クライテリオン」、「スタンダード」などの定義もその訳語なども専門家の間でさえ統一を欠いている。「到達度評価」にしてもその評価基準が明確化されていないと現場には理解し難いし、さらに実践は困難となる。そのため、これらの概念の対比・関連を考えながら用語を体系的に定義し概念規定をする必要がある。こうした基本的概念の枠組みを明らかにするために、諸外国の主たる教育評価の研究者たちの考え方とわが国での受け入れ方、とらえ方を対比しながら、問題点を検討した。

**梶田叢一****評価研究のアメリカ的的前提を問い合わせる**

わが国の教育測定・評価研究はアメリカにおける心理学の歴史的展開に大きく影響されている。教育的妥当性、有効性より客観性、厳密性を重んじる傾向、目標を行動目標としてのみとらえようとする傾向、客観テストによ

って学力の主要な部分が測定されるとしがちな点。さらに、評価によるフィードバック機能を組み込んだ最適な教授學習過程を設計し得るという考え方もアメリカ的操作主義の前提の上に立っている。しかし、これらすべては教育を矮小化するものである。

われわれの従来の評価研究の反省に立って、今後進むべき評価研究の課題を提起したい。(1)歴史的視野に立つ研究：今日新しい考え方として注目されている到達度評価やクライテリオンというような考え方も歴史的に遡れば、その源流をいろいろの時代に見出すことができる。これらの考え方や実践の意味を基本的にとらえるためには、その歴史的基盤と発展の過程を十分に検討すべきである。(2)アメリカにおける研究や実践の批判的検討：たとえばわれわれはブルームによって多くを学んだが、これを乗り越えていく視点も同時に学ばなければならぬ。i)目標のとらえ方が行動レベルに偏向してはいいのか、ii)認知的領域に偏りすぎて、情意的、技能的領域および統合的とらえ方が忘れられてはいないか、iii)学習のとらえ方があまりにも要素的で機械的構成論に走ってはいいのか、iv)形成的評価にしても、そのレベルやサイクルのとらえ方が固定的で微視的になってはいいのか、等の視点からの再検討が必要である。(3)日本の教育的土壤に根ざした評価研究を積み上げ：日本の社会や文化の中に根ざした教育評価の考え方を明らかにし、これを問い合わせること、教育の現場とその実践の中から評価の基本的原理や方法を掘り起こしていくことをしなければならない。

**吉崎 静夫****指定討論**

吉崎は指定討論者として次の4点についての議論を提起した。(1)到達目標と到達基準の設定のしかた：すべての子どもに保障すべき到達目標はどのように設定されるべきか (2)到達度評価における評価の客観性と教育的妥当性は十分に満足されるか (3)授業評価から教材・カリキュラムの開発・評価と進む場合に形成的評価はどのような役割をもつか (4)ブルーム等によるタキソノミー以来、情意領域の評価研究にはどのような進歩があるか。

これらについて話題提供者からの発言がそれぞれありまた、一般的な議論にも発展した。(1)については目標設定が現状分析の中から進められなければ、到達可能な目標の設定はできない。(2)到達度評価については評価者の認定的基準というものがあり、評価者が同時に教授者であることに意味がある。(3)教材に関する教師と子どもたちの学習の場からのフィードバックは従来のものに